

計画における3元論の展開¹⁾

3-principals in Planning

山田 正人²⁾

Masahito YAMADA

1. はじめに

2元論にもとづく計画論が数多く展開された。しかし、2元論の両翼はゲシュタルト心理学に言うところの「図と地」のうち、両者とも「図」をなすと解釈される場合がほとんどである。ならば、今一つ「地」についても考慮に入れる必要がありそうだ。

古来、キリスト教の三位一体思想や皇位継承における三種の神器、司法・立法・行政の三権分立、最近では御三家、三都物語等各種キャンペーンにも、「3」が用いられている。

作田啓一は、社会学の基本は対人関係にあるとの説があるが、対人関係は、第三者が居るから対人関係が客観的に成立すると述べている。2項関係は、選択する自分又は背景となるその他大勢が存在して初めて成立する。

1次元2元論的計画手法に対して、計画概念の諸相は複雑である。2方向1停留(均衡[零])点の方向性はつかめが、測度(単位元)の概念をどう捉えるかで操作対象とはしづらい面があった。標準化を擁する統計的手法も基本的にはこの体系を逸脱しない。

ここでは、音楽理論の基礎とされる、リズム(R)、メロディー(M)、ハーモニー(H)に3元論を対応させて考察する。

まず、3元論の類型のうちいくつかを提示し、該当する例について考察を加える。

音楽理論に基礎を持つRMH型について概説を加え、民俗、歴史、地理(自然・環境)との対応について述べる。

地域計画・港湾計画への適用を示し、個性のある計画化のモデルの一つとする。

2. 3元論の類型

1) 1次元2元論的モデル

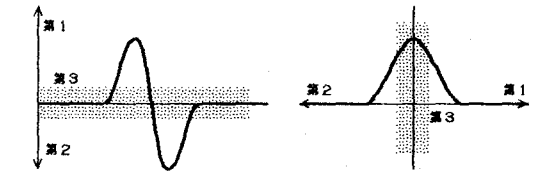


図1

どちらが左[右]、上[下]、遠[近]にありまつかと問うた場合、集計的に捉えると、ほとんど中央に集まっていることがある。「絶対的な左」と「相対的な左」とは十分注意して区別しなければならない。

2) 3すくみ同一階層モデル



図2

原因と結果の関係によってどのように調整されるのか。過程としての順序は、操作対象と共に大事である。ただ、結果としてどの事象も対等であることがわかる。過程が不可逆であれば、相関関係は成立しないことに注意する必要がある。

3) 集合論(ベン図)的モデル

1)からすると3元の範囲を超えるかも知れない。共通項の取り扱いと各元の独立の程度が問題となる。確率論を用いる場合には、「事象」が何を指すかについて

¹⁾ 計画手法論、地域計画、空間設計

²⁾ 正会員、工修、岡山大学工学部(〒700岡山市津島中3-1-1, TEL086-251-8163, FAX086-253-2993)

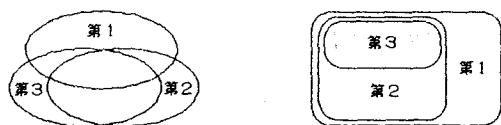


図3
て検討すべきである。

4)空間論的モデル

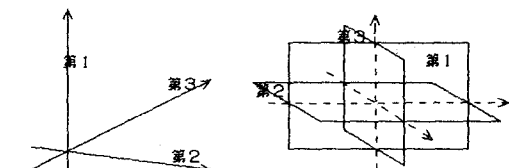


図4
計量心理学で用いられるSD法においては、おおよそ抽出された3軸でその変動のほとんどを説明できるという。たかだか線形な空間において直交する3軸でイメージが捉えられるものとする、我々の知覚における空間の感覚、すなわち縦、横、高さに対応する空間に投影される程度の理解が、基礎的なイメージを構成するといってもよいとの仮説を得る。

5)Rythm、Melody、Harmony型モデル

和声的に合理化された音楽は、すべてオクターブ（振動数比1:2）を出発点とし、此のオクターブを5度（2:3）と4度（3:4）という2つの音程に分割する。つまり、 $n/n+1$ という式で表される2つの分数によって分割するわけで、この過分数はまた、5度より小さい西欧の全ての音程の基礎でもある。

M. ウェーバー

西欧音楽において、全てのメロディーは、ここに言う音程の組み合わせによって表現される。オクターブの音程はたかだか12の音程に分割される。ほとんど全ての音楽は、時と場所を移して再現するために、この体系を受け入れて伝えられてきた。

まず最初にそれを思い起こしてみよう。

リズム（R）は単位（時間）に対して規則正しく繰り返されるものである。メロディー（M）は経時的な音程の組み合わせによって変化の様相を与える。ハーモニー（H）は同時的な音程の組み合わせによって状態の様相を表す。音程の体系によって振動数という物理性状に対して相似形であるが、重ね合わせの度数によって歪みを生じる。（ピュタゴラスコンマ）

3. 民俗・歴史・地理（自然・環境）との対応

ここに言う民俗は、人間の生活を司るものである。時間の単位を内在し、営みの中に位置付けられる。日々あるいは週・月・季・年を、あるいは一生を単位とする。地理をはじめとする環境に依拠することが多い。

歴史は、民俗の変化する契機や状態を綴るものである。地理や環境の変化を通して民俗に働きかける。

地理や環境は歴史の重なりの結果生じる。民俗に直接影響されることはないと考えられるが、歴史を通じて間接的に影響を受ける。

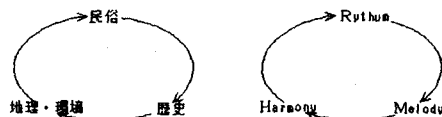


図5

M. ウェーバーは、合理的に設定された12音程をもとに諸民族における音楽について比較検討している。西欧においては、ドレミファソラシにあたる7つの音程がよく用いられ、ピアノの黒鍵にも対応する5つ音程が例えば日本等においてはよく用いられることを指摘している。

但し、メロディーを構成していく上では、その他派生した音程が用いられることも指摘しており、その音程は必ずしもここで言う合理的な音程の体系に依拠しないことも指摘している。

4. 地域計画への適用 一岡山圏を対象として一

港湾計画のテーマ設定と変遷

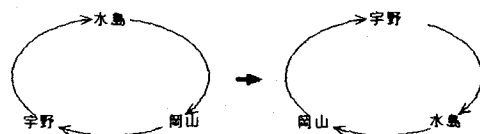


図6

大型船舶が入港できることから、小型船舶も係留できることへとそのテーマは変遷し、新産業都市等の指定から、自立的な港湾へと個の主張が望まれている。

参考文献

- 1) マックスウェーバー（安藤英治他訳）：経済と社会音楽社会学，創文社
- 2) 作田啓一：価値の社会学，岩波書店，1972
- 3) 山田正人他：「奈良らしさ」を具体化させるためのプロセス，土木計画学研究・講演集15，土木学会，pp. 1011-1016，1992. 11